

公共社会学の現代的条件 プラグマティズム と「公衆との対話」

伊 奈 正 人

1. はじめに

東北社会学研究会(2011年10月)において報告「公共知識人論とミルズ社会学」(伊奈2012)を行った。その際、矢澤修次郎先生(以下敬称略)からコメントをいただく機会を得た¹⁾。提起された問題は一言で言えば次の2点になるだろう。第一に、公共社会学にせよ、公衆にせよ、公共知識人にせよ、それを可能にする社会的条件が問われなくてはならない。報告のミルズ解釈は、公共社会学の現代的条件 グローバル化、自由化など現代資本主義の構造変動 を看却していないか。第二に、文学的リアリズムに重点をおいた筆者のミルズ解釈は現代的な有効性を保持しているか。この2点である。

筆者の近著(伊奈2013)は、こうした問題提起を踏まえたものである。しかし、問題提起に応える議論を直接展開するものではなかった。そこで、この機会に、それを試みたいと思う。矢澤の問題提起は、現代社会における公共社会学の存立について簡潔に要約し、公共社会学を巡る論争に一石を投じるものでもある。それに応えることで、ミルズ研究の立場から公共社会学にコミットすることにもなるであろう。

まず、2では、矢澤の批判を踏まえて、第一の問題提起に応える。50年代の権力論争においてミルズのみが可視化しえたことがあり、それが公共社会学の

1) 報告やコメントは『社会学研究』第91号 2012年の特集に所収。

現代的条件 = 現代資本主義の構造変動の先駆的な解明になっている。これが、検討の仮説である。

3と4では、第二の問題提起に応える。「公衆との対話」という観点から、ミルズ社会学の可能性を批判的に検討する。柄谷行人やB・ベンヤミンの翻訳論、鶴見俊輔やL・メナンドのプラグマティズム解釈を批判的に追補するとき、ミルズの社会学的なリアリズム論は、「公衆との対話」という論点の解明に一つの途を開く。これが、3と4の検討仮説である。

2. 公共社会学の現代的条件 矢澤修次郎の問題提起を手がかりに

2.1. 人間喜劇とリアリズムの現代的条件

上記シンポジウムにおける筆者の報告は、バルザックの文学的リアリズムに傾倒し、社会学的な人間喜劇を構想するミルズに注目した。ミルズは「動機の語彙」論も社会構造論も体系化することはなかった。しかし、ミルズは、公衆に「届くことば」で、人間模様を描いた、と。これに対して、矢澤は次のように批判する。「何故体系化の方向を取らず、バルザックの人間喜劇の社会学バージョンを作る方向を選択した」のか、「現代資本主義下に生きる人間模様を考察する場合、果たしてバルザックで十分だろうか」と（矢澤 2012 p. 327）。

矢澤は文学的リアリズムの援用を否定するわけではない。「現代資本主義下に生きる人間模様」のほうにも注意を喚起し、バルザックのリアリズムの素朴さについて批判している。ミルズと対比されているのは、Z・バウマンであり、ミラン・クンデラである。クンデラは、「たえずバルザックの小説美学を批判し、名前も持たない人間や動物が、はっきりとした日付もない時間の中で、あるいは近代的とは言えない時間や空間の中で行為する、そうした小説の美学を探究している」（矢澤 2012 p. 127）。こうした状況においては、バルザックの人間喜劇の社会学バージョンを作るだけでは、十分ではない。そう矢澤は批判している。

文学にせよ社会科学にせよ。知的営為が今日対峙すべき問題がある。それは、引用されているバウマンの用語を用いれば、リキッド・モダニティの問題、いわば社会の液状化という問題である。にもかかわらず、ミルズのように具体性のリアリズムを主張するだけならば、問題と対峙すらしていないことになる。

そんな議論には意味がない。今必要なのは、現代社会の根本問題と向かい合い、リアリズムの条件、人間喜劇の条件を再考察することではないか。

ミルズ社会学は、60年代のニューレフトによって支持されることになる。では、何故支持されたのか。一言で言えば、アメリカ社会の問題を、誠実に省察しようとした反省性、再帰性が故だったと言えるだろう。これはミルズのスタイルに対する評価であるが、ミルズに対する評価はそれにとどまるのか。ミルズ社会学は、公共社会学はいかなる実質的な理論を提示しうるのか。そして、そこで、文学的なリアリズムの問題はどのように位置づけることができるのか。矢澤の批判は、こうした問題を問いかけている。

もう一点、矢澤 2012 は、J・デューイの『公衆とその諸問題』にからめて、公衆論について問いかけている。資本主義の現代的展開を踏まえながら、公衆を可能ならしめる社会的な条件について問いかけている。公共社会学の争点なども視野に入れながら、これらの論点を考えてゆこう。

2.2. 液状化する社会と公共社会学の争点

2.2.1. 公共社会学と専門知 液状化するモダニティの再構成

M・ブラウォイ (Burawoy 2005) が提起した公共社会学とは、一言で言えば、専門的社会学とはことなり、公衆との対話を行う社会学であり、マルクス、ウェーバー、デュルケム、あるいはミルズのように時代時代の公的な問題を省察する再帰性を持った社会学である。専門的知、専門的社会学の自閉化、些末化などを批判し、公衆との対話を提起した知見は、ミルズの社会学的想像力の再検討を迫っている。こうした問題提起の影響は、批判社会学、マルクス主義などにとどまるものではなく、ブラウォイの言う専門的社会学の領域にも及んでいる。そして、計量的方法、数理的方法、規範理論などにおける社会学的想像力のありようが再検討された。そして、専門知の側からの反論もある。典型的なのは、たとえば、次のような問題提起である。

「今日の社会学が直面している本当の問題は、まさにこの「客観的真理」という価値が根底から疑われているということなのだ。専門的社会学は「公衆に向けて発信していない」ことに問題があるのではなく、発信するに値するほどの理論的知識を生産できていないことが問題なのである。近年は質的か量的かを問わず、片々たる些細な経験的事実の報告にとどまる研究が横行しているが、

それは経験的な諸事実をたばねるべき「理論」が欠落しているからであり、その背後にあるのが「客観的理論」への不信感である。重要なことは、専門的であつてかつ public であるような社会学を構想することだ。」(盛山 2006 p. 93)

バウマンが指摘する液状化、第二の近代という問題意識を共有した上で、専門知による規範的再構成を課題とする公共社会学が提起されている。専門的な貢献の公共性を重視する知見は、オーソドックな識見として確認しておきたい。しかし、なお、公衆との対話が争点として提起されるのは何故なのか。

2.2.2. ブラウォイの情報資本主義批判とリアリズム = 可視化の方法

公衆との対話を提起するブラウォイの議論は、問題状況としての歴史的な変動を見すえようとするものである。それは、現代資本主義の展開であり、その到達点としての情報資本主義の問題である。矢澤は、こうしたブラウォイの公共社会学を次のように要約している。

「ブラウォイの公共社会学は、Z・バウマンやR・セネットも明らかにしていることですが、情報資本主義化の人間は資本からも国家からも科学からも手助けを与えられずに自分自身で問題解決するしかない状況にあることを踏まえて、なんとか問題解決の糸口を市民とともに考えると同時にそれを市民に提供できる社会学を作り上げてゆこうとするものであると、理解できます。その社会学を完成させるためには、世界各地で展開されている社会学からのインプットを必要としますし(グローバル社会学)、また大学資本主義、大学の危機に対処しながら、市民社会の公共性を作り上げてゆかなければなりません。」(矢澤 2012, p. 119)

矢澤は、公共社会学の基本文脈を、バウマンやセネットと関連づけながら、情報資本主義の問題としてとらえている。そして、公衆に問いかけることが、なぜ現代社会学にとって重要なのかを手短に、しかし明確に指摘している。

情報資本主義に着目するということは、人と人とのつながりを分解し、再編するドラスティックな動態に着目するということであろう。資本の運動は、つながりの解体と再編を繰り返す。時代時代に絶妙な落としどころを発見し、相対的な安定が構成される。たとえば、宗教儀式、地縁、血縁などのつながりの

再編により創り出された国民国家を単位とした民主主義，近代家族，職業などは，相対的な安定を与える絶妙な落としどころであった。それが，今日，ドラスティックに再編成されている。解体と再編の繰り返しのなかで，資本の運動は純化してゆく。そして，相対的な安定を徹底的に解体し尽くした極に，情報資本主義は位置づけられる。

自由化，流動化，グローバル化，あるいは情報化などは，容赦のない徹底した解体と同義である。解体され切り売りされる労働者の立場になってみれば，こうした趨勢は，深刻な問題である。ブラウォイは，マルクス主義社会学の立場から，これを問題にしたと矢澤は言う。

「1960年代に産業化の極点に達し危機に瀕した先進資本主義は，1970年代以降，労働世界を破壊し，それを情報世界に置き換えることによって，危機を克服しようとしてきました。その試みは，1980年代～90年代に成功を収めました。ブラウォイはその変動過程の中にある草の根の人々を，あくまでも内側から捉えようとしてきました。その営為を支えたのは，アントニオ・グラムシの有機的知識人論，ヘゲモニー論だったと思います。そして彼は，60年代の批判を継承し，さらにそれを発展させる形で，情報資本主義を批判し，自分自身以外に自らに援助の手を差し伸べてくれるものがない現状の中で，如何にして社会と社会科学からの草の根の人々の生きることを支援することができるのかを，公共社会学のもとに探ったのです。」(矢澤 2012 p. 121)

マルクス主義の立場に立つブラウォイの視点は，液状化の問題の背景にある情報資本主義の問題を可視化する。そして，貫徹する歴史的変動によって破壊されている人間の社会を見すえ，それを揚棄する歴史的主体，そして公共社会学の可能性を論じるものである。

公共社会学の方向性はいろいろあるだろう。一方で，マルクス主義の方向性，そしてそれ以外にも，グローバル化や自由化とは別の公共性の芽を描き出そうとする議論が想定できる。他方で，グローバル化や自由化を，可変性，自在性，制御を確保する条件としてとらえ返そうとする議論も想定できる。ミルズの社会学は，マルクス主義的な社会学において，重要な手がかりとなってきた。ブラウォイも公共社会学の先駆的な存在としてミルズを位置づけている。

秩序の解体と再編という問題を捉え，対策の方途を可視化する方法論を問う

ことは、社会学的なリアリズム = 可視化の方法について問うことである。議論の方向性により、様々なリアリズムの可能性があるだろう。数理的な方法、計量的な方法、歴史構造的な方法、これらいずれも明快な可視化の方法、リアリズムであるといえる。方法はいずれも、秩序の解体と再編という課題と向かい合って生み出されたものである。公共社会学の争点は、混沌の認識とその再構成の方法を巡るものである。

2.3. 権力論争とミルズの状況認識 機能的一元化論への再評価

こうした公共社会学を巡る見解の対立構図 新しい主体（公衆や労働者など）の分析的可視化、歴史構造的な可視化、文学的な可視化 は、ミルズが一石を投じた権力論争の構図とほぼ重なる。権力論争においては、アメリカ社会の大衆化という問題提起に対し、分析的再構成、歴史的構造変革、自由主義の保守などにより、大衆化という混沌の問題性が可視化でき、自律的・民主的・多元的なものが確保されると主張された (Domhoff et.al. 1968)。

論争において、ミルズのみが可視化できていたことがあるとすれば、それはなにか。一言で言えば、権力の一元化である。社会の再構成の意匠を巡って、権力論争は戦わされた。ラディカルな立場は、多元的民主主義の無効を指摘し、その原因を支配者階級の専横に求めた。リベラルな立場は、混沌の多元的再構成を可能にする条件として、機能構造の分析的認識を提起した。ミルズは、機能的な構造の厳存を見すえ、機能的な構造の一元化 = 多元的な構造の機能不全を可視化した。そしてそれが支配者階級をも飲み込んでドラスティックに展開して行くことを批判した。支配階級も巨大な構造を制御できていない。よって、支配権力を批判するだけでは問題は解決しない、と。ミルズは、グローバル化、情報資本主義などとして今日言及されているものを、先駆的に洞察していたと言うことはできないだろうか。そこにミルズの今日的な意義があるのではないか。これが筆者の解釈である。それでは、文学的リアリズムの問題はどうなるか。

2.4. アウトサイダーの眼

ミルズの文学的リアリズムについて、反知性主義的な傾向、扇動的な傾向があることを批判する議論もある。たしかに、ミルズは、扇動的に現実分析を突きつけた。いつのまにか権力が集中している。古き良きアメリカの民主主義

の理想は崩壊している。これではファシズムと同じではないか。知識人は技術者の政治の歯車にすぎなくなった。公衆は問題を直視すべきである、と。

怒りにまかせたミルズのことばは、60年代のラディカルな社会運動のなかで高く評価された。多元的で民主的な社会としてのアメリカの背後に、人種差別やベトナム戦争などがあったことを問題にすると、身体をゆさぶる情動的なことばは、評価された。しかし、現代社会において、公共社会学を考察する場合、問われるべきは文学的リアリズムが公衆の改造、再構成とどう関わるか、その社会学的実質はなんなのか、ということになるはずである。

とりわけ注目すべきは、ベルのミルズ批判である。ベルは、いわゆる権力論争において、ミルズの間人喜劇を「俗流社会学」として切り捨てている。レトリックを腐心し、力強い公衆民主主義というようなアメリカ的ノスタルジーに訴えかけるようにして世論の喚起を狙ったポピュリズム的な書物である、というのが批判の主旨である。「ミルズはバルザックを手本にして、バルザックが風俗研究と呼んだ、社会風俗の「喜劇」を描いている」。(Bell 1960: 43-44=1969: 33-34)。ベルは、ミルズとバルザックに共通するものを、アウトサイダーの怒りに求めている。アウトサイダーの怒りにまかせた筆致をベルは批判した。

しかし、ベルの批判は、結果として、ミルズがなぜ人間喜劇に傾倒したのかを明らかにしている。すなわち、アウトサイダーの眼でものごとをとらえること。黒人問題やジェンダーの問題などについてはいささか問題があった²⁾が、ミルズは異邦人の眼から、アメリカ社会の機能不全、ドラスティックな解体、一元的な再編成のなかにある人間存在を描出しているようにも思われる。

一例をあげれば、伊奈 2013 でも言及した同時に三つのことをする男についての描写である³⁾。それは、キュービズムを彷彿とさせるようなものと言ったら言い過ぎだろうが、たとえばバウマンの立論にも接続可能なものであり、リアリズムの転換をも示唆するものであるように思われる。その男は、片方の耳と目でテレビの野球観戦をし、もう片方の耳でラジオの音楽番組を聴き、もう一つの目と両手を使って雑誌をめくっている人である。食生活は不安定で、通勤に往復1時間、取るに足らない複雑な仕事を淡々とこなす疲れ気味である。

2) Geary 2009 は、人種問題、ジェンダー問題の二つについて、ミルズはいささか不見識であったと随所で指摘している。

3) この事例の重要性については、中村好孝から教示いただいた。

休日は、様々な消費財を購入，使用するのに四苦八苦している。ミルズはこの男を詳しく描写したあとに，それを「労働と余暇の統一」の例として，話にオチをつけている。そして，余暇が生活の目的になり，余暇倫理が，仕事の価値を含めてあらゆる価値を飲み込んでいる，とミルズは分析を行っている。さらに，「真の自己開発が 純粋な芸術と同様に アメリカ的日常生活の主要な型から孤立してゆく傾向にある」(Mills 1953 1963, p. 349=1971, p. 379)，と結んでいる。

アウトサイダーの眼という論点とは別に，文学的リアリズムの問題がもう一つある。それは，次節の公衆との対話という論点と関わる。

3. 公衆と対話することとリアリズム = 可視化

3.1. 公衆に「届く」こと

ブラウイの提起する公共社会学も，ミルズの社会学も，公衆との対話を重視し，問題を提起する社会学だった。それでは，公衆と対話することとはなにか。まず，公衆に「届く」こと(3.1.)，「根ざす」(3.2.) ことについて考察した上で，翻訳という観点から公衆との対話についてまとめる(3.3.)。

まず第一に，「届く」ことば，明確なイメージを提示する表現，公衆に訴えかけるようなことばで語ることにについて考察する。公衆に「届くことば」で語ることを，ミルズは自覚的に心がけた。『ホワイト・カラー』や『パワー・エリート』はそうした努力の産物であった。ミルズの苛烈な批判は，「ぶっ壊し」の異名をとった。かつてのマックレーカーに喩えられ，アメリカの反知性主義の伝統のなかに位置づけられることもある。しかし，ミルズの著述スタイルは，意図的に計算された知的営為であったとも解釈可能である。

文体の工夫についてはミルズ自身随所で述べている。ミルズは腐心して，用語や事例や数字を，メタフォリカルに用いた。40年代にミルズは，D・マクドナルドへの手紙で「社会学的な詩」(sociological poetry) というアイディアに言及している(Mills 1948)⁴⁾。詩句は，ことばの魔法である。簡潔なことばにより，鮮やかな可視化が行われる。同時に，ことばの波紋は，さまざまな綾，ニュアンス，含みを表現する。それでは，ミルズが文学的表現や文体上の工夫に

4) この点については，Summers 2007 が代表的な研究論文である。Summers 2006 は，Decatur Study について研究した論考である。

こだわったのは何故か。

たとえば『パワー・エリート』の論脈を考えてみよう⁵⁾。上でも述べたように、同書には、アメリカ社会学とマルクス主義の狭間で、社会学的リアリズムや社会学的想像力を模索したミルズ社会学の特徴が典型的に現れている。アメリカ社会学は当時、システム論と統計的な方法を両輪とする社会学を標準化し、制度化しつつあった。それは、理論やデータによる可視化を通じて、多元的社会の制御という処方箋を提示し、洗練させていった。一方、歴史的な社会構造論を駆使するマルクス主義は、支配階級と労働者の対立を可視化し、ラディカルな社会変革を処方箋として提示していた。

これに対して、ミルズは、すべてを徹底的に解体し一元的に再編成する動きを看取し、それを危機として指摘した。一元化は、社会制御、階級闘争といった処方箋の構造的根拠をも飲み込んで進行する。ミルズはエリート概念を隠喩的に用いた。システム論や社会計測が探求した多元的意思決定のための方程式の均衡解を求める試行も、結局は一元的な機能構造の周流に回収されてしまう。また、マルクス主義が提起する支配階級論でさえも、権力集中の無軌道、機能不全を視野に入れなければ無意味となる。言葉を換えれば、支配階級はドラスティックな一元化のなかで自律性を喪失している。体制変革にせよ多元的制御せよ、新たな段階へのステージアップを示すものではなく、周流をくりかえしてきたエリート支配を今一度再生産するだけである。こうした対比的な構図を可視化する隠喩としてエリートがもちいられた。社会科学的様々な検討課題を逃さず含むことばであると同時に、問題の全体像が明快に形象化される。

3.2. 公衆に「根ざす」こと

ミルズは、このようにして、アメリカ社会の現状について、「届く」ことばで公衆に語りかけた。そのことによって、公衆に根ざした公共社会学も可能になる。公衆との対話を巡り、第二に検討する論点は、公衆に「根ざす」ことである。ブラウォイの公共社会学論においても、「届く」ことばで公衆に語ることとならんで、公衆に「根ざす」社会学の再帰性の重要性について強調している。ブラウォイは、この論点を巡って、R・ジャコビーの所説を引用している。伊奈 2013 で詳細に論じた（第7章）が、要点を確認しておきたい。

ジャコビーの主題は公共知識人論である⁶⁾。ジャコビーは、随所で「根ざす

5) 詳しくは伊奈・中村 2011 を参照。

こと」(vernacular) について議論している。公衆に「根ざしている」ことは、公共知識人の重要な側面である (Jacoby 1987, p.x)。一方、専門職化 (professionalization) により公衆に「根ざした」知識人が「見えなく」なりつつあることは一つの脅威である (Jacoby 1987, p.x)⁷⁾。そうジャコビーは言う。そして、公衆に「根ざしている」ということは、語りかけることばを持っているということである。

ジャコビーは、再三ガリレオに言及している。ガリレオが問題視された理由は、主張内容もさることながら、イタリア語で公衆に向けて語ったことにある、とジャコビーは言う (Jacoby 1987, p. 235)。すなわち、公共知識人とは、ラテン語、学術用語、思想用語・批評用語、あるいは「人工言語」に安住するのではなく、公衆に「届くことば」をもっている存在ということになる。かつての公共知識人は、そうしたことばを持ち、また語りかけるべき多数の公衆を希求し、発見できた。これに対して、「見えない知識人」たちは、語りかけることばを喪失し、大学内で専門家たちに向かって語るのみである、とジャコビーは言う (Jacoby 1987, p. 78)。そして、ニューレフト、ポストモダンという思想潮流も、同様のものとして一括りにしている。

ジャコビーは、ガリレオの他にはや聖書を独訳したルター、そしてミルズを公共知識人の典型としている。公共知識人が語りかけることばの問題は、公共社会学のことばの問題とほぼ重なるものである。そして、公衆と対話を重ねることで、再帰性が惹起され、公衆に根ざした社会学が可能となる。ミルズは、対岸の火事にすぎないと思われていたヨーロッパのファシズム、東欧知識人の胎動、「キューバの声」、中南米・アジア・アフリカなどに注意を傾注した。ブラヴォイが、公共知識人ミルズをことさらに評価するのもこの点においてであろうと思われる。

3.3. 翻訳者の思想 公共社会学と歴史的主体

さて、以上検討した「届く」「根ざす」以外に、公衆との対話について、第三の論点が検討されなくてはならない。それは公共社会学や公衆の生の根幹と

6) この用語はジャコビーが初めて学問的に提示したものとされている。

7) こうした立論は、『社会学的想像力』を執筆したミルズのモチーフと重なる。また、矢澤 1984 が、A・オーバーシャルの社会学の制度化論などを手がかりに、アメリカ社会学の歴史を解析したことも重なる。

関わる論脈である。この論点は、アメリカの知が、ヨーロッパから分析的な知、いわゆる論理実証主義をとりこみ、新しい知の改造を行ったこととも関わってゆくことになる。

柄谷行人は、二葉亭四迷を中心に翻訳論を展開した折、ルターの聖書翻訳に触れ、ジャコビーが言った人々に届くということとは正反対の面に触れている(柄谷行人 2005)。それは、ラテン語の聖書によって、近代ドイツ語が体系的に整備されたという側面である。柄谷は次のように言っている。

「ルターが『聖書』をドイツ語の俗語で翻訳したこと、そして、それが標準的なドイツ語になったことはよく知られている。フィヒテは、ドイツ語をギリシャ語のみが比肩しうる唯一の原言語であり、その他の不純な言語と異なると言った。彼はドイツ語が翻訳によって形成されていることを忘れて、そのオリジナリティを主張しているのだ。ドイツ語だけではない。近代のナショナルな言語はすべて翻訳を通して形成されているのである。しかし、大切なのは、何故ルターの翻訳がドイツ語を形成してしまうほどの強い影響力をもったのかということである。ベンヤミンは、ルターの『聖書』がもった影響力を、やはり、それが逐語的な翻訳であったことに見出している。」(柄谷 2005, p. 14-15)

わかりやすい、こなれた訳をする意識は、意味に囚われた翻訳である。これに対して、逐語的翻訳とは、翻訳元において意味に囚われている「純粹言語」を、翻訳先のことばにおいて救済する作業である。そう柄谷は言う。(柄谷 2005 p. 13) ルターの翻訳は、テキストへの揺るぎない信仰に基づいたものであり、神聖なもの、純粹なものを救出する営為であった。翻訳とは神的な不変に向けた探求である。柄谷はベンヤミンの翻訳論を引用している。

「純粹言語とは、みずからもはや何も志向せず、何も表現することもなく、表現をもたない創造的な語として、あらゆる言語のもとに志向されるものなのだが、この純粹言語においてついに、あらゆる伝達、あらゆる意味、あらゆる志向は、それらがことごとく消滅すべく定められたひとつの層に到達する。そして、まさにこの層から、翻訳の自由はひとつの新たな高次の正当性をもつものであることが確認される。この自由は、あの伝達される意味　この意味から解放することがほかならぬ忠実さの使命なのだが　によって存続するので

はない。翻訳の自由はむしろ、純粹言語のために、翻訳の言語を拠り所としてみずからの真実性を証明する。異質な言語の内部に呪縛されているあの純粹言語をみずからの言語のなかで救済すること、作品のなかに囚われているものを改作のなかで解放することが、翻訳者の使命にほかならない。この使命のために翻訳者は自身の言語の朽ちた柵を打ち破る。そのようにして、ルター、フォス、ヘルダーリン、ゲオルゲはドイツ語の限界を拡大したのだった。」(ベンヤミン 1996, p. 407-408)

ここに描き出されている翻訳は、普遍的な純粹性、神聖性に向かうことであり、翻訳者はそれを実践する歴史的な主体である。公衆を、そうした翻訳者としてとらえ返すこともできるであろう。対話する相手が、社会的な弱者、マイノリティ、あるいは「向こう岸」(良知力)の人々である場合も同様であろう。そうした対話においては、当たり前を疑い、異化することは、純粹型を探求する双方向的な共同作業としてとらえられることになる。そしてこう考えることで、大衆文化におけるアウラに注目すること、わかりやすく語ることなどが、普遍的な歴史的主体の往還的、媒介的探求として明確にとらえ直される⁸⁾。

ミルズが提起した動機の語彙論は、ことばの原基的構造を問うものだった。これを、ことばの純粹型などと読み替えれば、翻訳と言語の純粹型という論脈に接続することも可能となる。また、ミルズにおける公衆論の展開、世界戦争論などを、動機の語彙論に照らして、歴史の主体論として読み替えてゆくこともまた可能となる。こうした解釈を採るならば、アメリカ社会学のなかで例外的にヨーロッパ的な視点に立った社会学者、晩年のマルクス主義への接近といった旧来の解釈を積極的に再検討しなくてはならないかもしれない。矢澤 2012 は、そうした再評価の是非を問題提起していたようにも思われる。

以上、公衆と対話を巡り三つの論点を確認した。とりわけ第三の論点は、思想史におけるアメリカとヨーロッパ、歴史的主体の普遍性といった問題とも関わり、さらなる検討が必要となろう。そうした展開の可能性も視野に入れつつも、ここでは、ファンダメンタルなプラグマティスト(矢澤 1971)というミルズ像にも照らしながら。伊奈 2013 の立論に、その後の研究成果を追補し、公衆論の観点からまとめ直す。これは、冒頭に掲げた公衆論を巡る矢澤の問題提起に答える試みでもある。すなわち、情報資本主義がグローバルに展開する

8) 柿木 2014 は天使の表象を用いて、ベンヤミンの翻訳思想考察の手がかりとしている。

現代社会において、デューイ的な公衆の改造論は有効性を持つのかということ。

考察を行うために、いったんミルズを離れて、鶴見俊輔やL・メナンドのプラグマティズム解釈を検討する。両者は、戦後思想としてプラグマティズムを解釈している。そうした解釈により、公衆の知と専門的な知、公衆の知と分析的な知などの関連を明らかにすることができる。これは、ミルズの公衆論を批判的に再構成する糸口ともなるはずである。

4. 公衆の改造とプラグマティズム

4.1. 制御する者としての公衆

まず、議論の準備として、伊奈 2013 で詳述した歴史的なコンテクストについて、図式的に要約し、整理しておきたい。19世紀から20世紀初頭にかけての現代社会論の転換と大衆社会論争について検討し、基本文脈を図式的に整理しておこう。ファシズムや社会主義国家の登場は、市民社会論を失効させ、大衆社会論を生み出した。アメリカにおける大衆社会論争は、大衆社会論のアメリカ社会への妥当性をめぐって行われた。アメリカの多面的な産業社会には、大衆社会論は妥当しないのか。これが大衆社会論争の核心である。

多面的産業社会の可能性を根拠づけたのは、工業化や科学技術化を巡る一つの状況判断であった。西欧の近代主義が純化してゆくと、その精髓とも言える科学技術化、自在化が自己目的化し、西欧近代が湛えていた貴族的な精神性を内破して行く。遺伝子技術、情報技術などは、直感的にわかりやすい例であろう。そうした技術は、すべてを「組み換え」「編集」など別の操作へと変換して行く。かけがえのない個体、その精神性などといったもの、そしてその割り切れない不条理、曖昧さ、ジレンマなども、ドラスティックに機能的なパーツ・部品へとクールに解体され、分析的に再構成される。そうした変換に、非合理的で無軌道な大衆も、高貴な精神性も飲み込まれて行く。ヨーロッパ精神はそれを危機として捉える。これに対して、アメリカ哲学はそれをまたとない社会改造、そして学問改造のチャンスと考えた。

民主主義の破壊、精神文化の退廃を大衆化、工業化に看取して絶望するヨーロッパの知に対し、アメリカの知は、多数者の政治、科学技術、物質文明、消費文化などを逆用し、社会や知の改造を構想した。伊奈 2013 は、この状況判断を権力論の転換と結びつけている。読解の鍵となったのは、法社会学者 D・

メロッシの論考 (Melossi 1990) であった。メロッシは、M・ウェーバー的な権力＝強制論など従来の権力論とは異なる画期的な権力＝制御論の形成を考察し、アメリカ的なコンテクストを評価した。その際、権力論転換の要にミルズの動機の語彙論を定位する。伊奈 2013 はメロッシの議論を手がかりに、ミルズ社会学に一貫する視点としての動機論を解釈しようとした。

もっとも、ウェーバーにも秩序の構成という考え方はあった。ウェーバーは、近代的な秩序を構成する社会的行為を考える際に、動機概念を用いた。神の意思のあらわれとしての中世的な同質的な共同性に代わる、各々違う個人がつくりだす社会秩序を解明するためである。主観的意味の同定に着目する動機的な行為理解には、社会秩序の意図的構成というモチーフが伏在する。しかし、合理的な再編成という点に関しては「鉄の檻」というような判断を覆すことは出来なかった。

これに対して、アメリカの社会学は再構成の方法を洗練し、展開した。すべてをばらばらに解体して、合理的に再編成する分析的なリアリズムを問題解決の根拠として肯定的に捉える。そして、主観的な意味同定を自在に制御するために、神がかった原因実体を排除し、意味構成の分析的論理を徹底させた。たとえば、パーソンズは、フェティッシュな一元的な合理化の制御を可能にする操作的な規範理論の確立を通じ、生の意味を同定する勤勉の倫理、市民宗教等の再生を目論んだ。

制御とその枠組みを確立するために、分析的なリアリズムを提起したパーソンズの立論は、哲学の改造、公衆の改造を提起したデューイの思想を継承・発展させたものとも考えることができるだろう。ここでの問題は、こうした議論の現代的再評価である。そのため、伊奈 2013 は L・メナンド (Menand 2001)、加藤典洋 2013、鶴見俊輔 2007 などによりながら、プラグマティズムを南北戦争後の思想、有限性の思想などとして特徴づけ、公衆の改造の意匠を批判的に検討した。

唯一の正しさ、正義を掲げた戦争のあとで、落としどころ、折り合い、案配などとして正しさ、正義を考える哲学が生まれた。それがプラグマティズムである。メナンドの言う戦後思想というのはそういうことである。加藤は、メナンドの解釈、それに先んじて同様のプラグマティズム論を提起した鶴見の解釈に影響を受けながら、無限化の思想 マネーゲームを一元的に純化するグローバリズム、唯一の正義を純化する戦争への動き、頑迷な一神教的な思考

を批判し、平和や共生、有限性の思想を模索している。伊奈 2013 は、こうした方向性からミルズの平和思想を検討した著作とも言える。では、こういう観点に立つとき、どのような公衆解釈の手がかりが得られるのか。それを鶴見の著作を手がかりに考えてみたい。

4.2. 計測する者としての公衆

こうした解釈に照らし合わせるときに、分析的な方法 計量計測、数理解析、記号論、戦略的意思決定法などを巡ってひとつの分水界が浮かび上がるように思われる。すなわち、分析的変換を一元的な無限化としてとらえるかどうか。鶴見俊輔は、落としどころ、折り合い、案配を模索するやりとりのなかで、プラグマティズムが計測すること、測量することなどをことさらに重視していたことを、くり返し著作で述べている（鶴見 2007）。

鶴見は、プラグマティズムとともに分析哲学や記号論の紹介者でもある C・W・モリスを高く評価している。モリスは、プラグマティズムとウィーン学団の分析哲学を総合して記号学を定礎したことで知られる。そのことを、鶴見俊輔がプラグマティックな格率と関連づけて説明している。伊奈 2013 でも引用した箇所をもう一度引いておく。

「『資本論』第一分冊に：筆者補充）注釈があって、「価値」というとき、「自分はここでの価値を交換価値に限定する」と。そこが面白いんだ。使用価値は重大であることは認める、しかしあえて捨てると言っている。ここは哲学者としてのマルクスの偉大さだね。別の考え方があるって認めているんだ。抽象には、つねにその働きがある。……俗流のマルキシストは、抽象と現実を混同しちゃう。それはクワインが言う、「モノと言葉を混同している。そうでない人間は、今三人しかいない。タルスキとカルナップと自分だ」という、その洞察と非常に似ているね。」（鶴見 2007, p. 208-209）

表面的な現象を眺めているだけでは可視化できないものが、抽象的な思考によって可視化される。そのことによって、一元化的に無限化する資本の運動をとらえる。そうした抽象化の重要性は、自然科学の実験的方法を社会科学において代替するものとして、マルクスも強調したところであった。しかし、モノと言葉は混同できない。一つの純粹型に到達した抽象思考は、再び「上向」

(マルクス)し、社会科学的な認識を形象化しなくてはならない。

大戦間の時代に、プラグマティズムがひとつの「正しさ」を支持する哲学と化してゆくことを批判する知見がある。たとえば、矢澤修次郎(矢澤 1971, 矢澤 1984)のプラグマティズム批判, 社会学の制度化批判がそれにあたる。また、ジャコビーの見えない知識人論 (Jacoby 1987) も同様の文脈で考えることができるだろう。

4.3. 定義する者としての公衆

ここで注目すべきなのは、鶴見俊輔が、抽象的な思考を肯定しつつも、思考の一元的な変換とは全く異なる方向性をとっていることである。鶴見は、計測すること, 測量することとならんで、定義することを重視する。すなわち、様々な見解が鋭く対立していて、適当な案配で落としどころを探し、折り合いをつける方法としては、測ることとともに、討論のための共通の土俵としてことばの定義をすることを重視している。勝手なことばづかいが暴走していたら、とても折り合いはつかない。よって、一つ一つ言葉づかいを確認し、定義しなくてはならない。そうした定義をあつめたものを、鶴見は字引きに喩えている。それが鶴見にとっての記号論の重要性であり、モリスを評価する理由でもある。鶴見の記号論の論集(鶴見 1992)の冒頭には、「字引きについて」という論考が納められている。鶴見は次のように言っている。

「定義はどんなところからもできる、ということ、近代の論理学は教えた。どんなにふくざつな論理的なつなぎことばでも、「でない」と「そして」だけをつかって分解して定義することができる。おおきなウェブスターの字引きに六十万語はいつているとしても、それらは五百ほどの基礎英語の単語によっておきかえて定義していくことができる。いや、定義には、性質をぬき出してきめるやりかた(内包的定義)のほかに、ものそのものをさしてきめるやりかた(外延的定義)があるのだから、机をさすのに「本をのせるまたは字を書くにもちうる台」(広辞苑)などと言わずに、そこにあるあれこれをさすことで、つまり指一本あればできるのだ。」(鶴見 1992, p. 5)

鶴見は、一方で、ことばを原基的な定義で置換できると言っている。こうした方向性は、上で述べた翻訳者の思想との類比において理解することもできる。

すなわち、ことばの定義を重ねることで、ことばの純粹形をはっきりさせてゆくこととして、定義という営為を位置づけること。しかし、他方で鶴見は、内包と外延を巡る解釈を示し、指さしというイメージをくっきりさせる方法での定義も可能であるという知見を提示した。こうした、解釈は、上で述べた抽象と現実。クワインが言う「モノと言葉」の峻別という論点とも響き合い、そして、imaginative な定義という重要な論点の提起になっているように思われる。

鶴見は、 唯一の神的な実体であれ、分析的な構造や関係であれ、一元的な変換を行うような思考を忌避する思想、メナンドの言う戦後思想としてプラグマティズムを解釈した。そして、計測者、測量者、定義者などを、鋭く対立する議論に折り合い、落としどころを探る者として評価した。分析的な思考は、そうした案配の道具である。鶴見は定義集としての字引きという論点を、公と私という論点に関連づけている。少し長くなるが引用しておこう。

「言葉の意味は、その言葉とおきかえられるべつ言葉につけるものではない。その言葉がどういう条件でなにをさすか、その言葉をどのように使う習性があるか、などと、ふかくむすびついている。そしてそれは、すでに世界にとってきまってしまっている永遠不動のいままで〈おおやけ〉の字引きにしっかりとされるのではなく、人類がどのようにそれらの言葉を使ってきたか、という過去の事実についてさえも、十分な字引きはまだできていないのだ。人類がいままで使ってきた言葉についての、完全な字引きができたと仮定しても、その言葉を、いまわたしがどのように使うかは、わたしの自由なのだ。ただわたしは、自分の使う言葉がひとにりかいされないところから、いままでの使われかたを参考にしたうえで、自分の使いかたをえらび、また必要に応じていつまでも自分の言葉を自分で定義できるようにしておいたほうがいい。〈わたくし〉の字引きを自分ですこしずつつくってゆくと、言葉に対する自在感ができてくる。自由に言葉を思い出すきっかけ」がつかめるようになる。それからさらにすすんで、ほかの人たちの〈わたくし〉の字引きもまなぶようにしていくと、ほんとうの意味での相互交通ができるようになる。」(鶴見 1992, p. 6)

国語教育においては、〈わたくし〉の字引きづくりを助け、生徒相互の字引きの交通を助け、〈おおやけ〉の字引きと〈わたくし〉の字引きのつながりを

工夫することが大切だ、と鶴見は言っている。

4.4. 定義の普遍性と複数性　　いわゆる人工言語と自然言語について

別の論考においては、定義の普遍性をめぐって、人工言語と自然言語が対比されている。対比は、学術的なことばと日常的な言葉、専門的な知と公衆の知の関わりについて、明快な切り分けが行われている。ここに、字引きにおける〈おおよげ〉と〈わたくし〉、字引きの複数性を重ね合わせると、胚胎されている公衆社会学的な知見＝公衆との対話＝複数の字引きの相互交通のイメージがさらに膨らむように思われる。

「二十世紀に入ってから、ラッセルやカルナップなど記号論理学者の努力によって、すみからすみまで定義された学術用語の模型がつくられた。しかし、それはあくまでも人工言語（人間がまず自覚的に規則をつくり、その規則にしたがって作りだした言語　たとえばエスペラント、数学、記号論理学の言語）の領域にとどまり、自然言語（自覚的にいつ規則をさだめたという時期を決定できぬほどの昔から習慣のつみかさねでできたさまざまな民族の言語、ギリシャ語、ラテン語、エジプト語など）の領域では、すみずみまで明らかな思想体系はつくりにくいということもはっきりしてきた。たとえば、英語、ロシア語の場合、数百年もの習慣をひきずっているのです、どんなに簡略化してみても、一つの共通の意味をみんなにつたえるような言語はつくりだしにくい。自然言語を思想の道具としてどうつくりかえるかという問題は、数学のような人工言語を思想の道具としてどうつくりかえるかという問題とずいぶん性格のちがうことが明らかになった。」（鶴見 1992, p. 9）

鶴見はこうした判断に基づき、自然言語の深層部分に人類共通の普遍言語がかくれてはたらくと考えるチョムスキーの想定を評価してゆくことになる。こうした鶴見の議論は、言語論の今日的展開、そしてプラグマティズムの現代的展開からするならば、いろいろと問題はあろうかとは思ふ。しかし、ミルズの動機の語彙論、社会学的想像力、公共社会学を考察してゆくときの手がかりとしては、論点はいずれも示唆に富んでいる。

5. 公共社会学と公衆論へのコミットメント むすびにかえて

19世紀から20世紀への世紀転換期、整然とした社会の法則性、規則性、明確な理想が見失われ、社会科学は社会の混沌と対峙することになる。そこで登場したのが、混沌を再構成する知である。合理的再構成を鉄の檻や精神的な退廃など陰鬱な隠喩でとらえたヨーロッパの知に対して、アメリカの知は再構成をまったく別様に捉えた。鶴見俊輔は、落としどころ、折り合いを案配する思想としてのプラグマティズム像を提示し、アメリカの知を論定した。そして、案配する手段として、計測や定義を位置づけた。鶴見のプラグマティズム論は、唯一無二の真理や正義を志向する思想 その裏返しとしての虚無の思想 に対し、分析的理性の明快な位置づけを提起する議論であった。

鶴見の議論は、ヨーロッパ的な知とアメリカ的な知の岐分と総合を明らかにした。公衆論の現代的条件を解明する議論は、ミルズの公衆論を批判的に再構成する手がかりともなる。ミルズが探求したのは、抽象的で分析的なものととの対比で、具体的全体的なものを評価する論理である。これがこれまでの通説であった、文学的リアリズムについても、具体性にこだわり、分析性と具体性の対立図式に固執し、後者の増幅による可視化をミルズが目指したとされていた。

鶴見の知見はこうした通説を一新する。すなわち、鶴見は、分析的思考と具体的思考、抽象化と形象化、人工言語と自然言語などを不毛に対立させるのではなく、相互媒介させ、何とか案配し制御するための道具立てとして評価した。そして、一人一人の生活、一人一人の知性などを尊重しながら、公と私を媒介する公衆の生を明確に論じた。こうした立論は、今日ミルズを読み直す際の重要な糸口となる。

ミルズは抽象的な分析を行う社会学 社会システム論や社会調査 の批判を行っているのもまた確かである。鶴見の立論は、これについても明快な説明を与える。すなわち、ミルズの社会学批判を、分析的なもの たとえば連立方程式体系 へと一元的に変換してしまうことに限定して理解することである。ミルズが問題にしたのは、機能的パーツにすべてを分解し、再編成=再構成する着想それ自体ではなく、抽象的な概念操作、データ操作に社会学的営為を還元することで問題を解消する結果となっていることである。加藤典洋の言い方を借りれば、たとえばお金のゲーム、権力のゲーム、軍事のゲーム

と同様に 一元的変換という無限化が暴走することである。

可視化の方法 = リアリズムとして、ミルズは、歴史的方法、文学的方法を強調した。しかし、抽象化や分解再編成も否定していない。これが、筆者の解釈である。ミルズの言う社会学的想像力とは、どのような可視化の方法を採るにせよ、鶴見の言う〈わたくし〉の字引きに照らしてものごとを理解し、形象化すること、そして多くの〈わたくし〉の字引き、〈おおやけ〉の字引きとの相互交通をはかることではなかったか。ミルズの人間喜劇とは、そうした相互交通のなかで、アウトサイダーの眼の批判性、再帰性を見失わない視点として解釈できるだろう。そして、社会学的想像力が提起された意味合いも明確になる。

全体をまとめよう。

本稿は、まず基本文脈としての情報資本主義、リキッド・モダニティなどを確認した上で、それとミルズの明らかにした権力一元化という趨勢を関連づけた。そして、それが、情報資本主義批判という論点と一定の関連があることを仮定して検討を進めた。この仮定の妥当性については、今後検討しなくてはならない。

その上で、公衆と対話する公共社会学、公衆像の再構成を論じようとした。得られた議論は、ミルズ公共社会学、公衆論の実質的内容ではなく、その解明の糸口に過ぎない。

前者については、分析的なものと具体的な事象の媒介、複数のな〈わたくし〉の相互交通と〈おおやけ〉の媒介などを行うこと、として、「公衆との対話」を眼目とする社会学を、公共社会学として解釈できるように思う。

後者については、翻訳者、制御者、計測者、定義者などとあらわされる歴史的主体としての公衆像を明らかにした。それは、単なる普遍的な主体ではなく、個々人の日常生活、〈わたくし〉の字引きを大事にしながら、問題状況と対峙する人々である。普遍的な主体に固執するヨーロッパ的なものを超えた、マイノリティ、ポピュラリティと共生できるような主体像と言い換えてもよいだろう。

こうした糸口から、ミルズの公衆論や公共社会学を論じるのは、今後の課題としたい。

文献：

- Bell, D., 1960, *The End of Ideology : on the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties*, Freepress
(= 1969 岡田直之訳, 『イデオロギーの終焉』東京創元社).
- ベンヤミン, W・B・S. (内村博信訳), 1996, 「翻訳者の使命」『エッセイの思想 (ベンヤミン・コレクション9)』ちくま学芸文庫.
- Burawoy M., 2005, “For Public Sociology” *American Sociological Review*, 70.
- Domhoff, G. W. and Ballard H.B. eds., 1968, *C. Wright Mills and The Power Elite*, Beacon Press.
- Geary, D., 2009, *Radical Ambition: C. Wright Mills, the Left, and American Social Thought*, University of California Press.
- Gillam, R., 1981, “White Collar From Start to Finish” *Theory and Society*, Jan..
- Horowitz, I.L. ed., 1964, *The New Sociology: Essays in Social Science and Social Theory in Honor of C. Wright Mills*, Oxford University Press
, 1963, *Power, Politics and People : the Collected Essays of C. Wright Mills*, Ballantine Books (= 1971 青井和夫・本間康平監訳 『権力・政治・民衆』みすず書房).
- 伊奈正人, 2012, 「公共知識人論とミルズ社会学」『東北社会学研究』東北社会学研究会 91 ..
, 2013, 『C・W・ミルズとアメリカ公共社会 動機の語彙論と平和思想』彩流社.
- 伊奈正人・中村好孝, 2007, 『社会学的想像力のために 歴史的特殊性の観点から』世界思想社.
, 2011, 「エリートと支配」井上俊・伊藤公雄編 『政治・権力・公共性 (社会学ベシックス9)』世界思想社.
- Jacoby, R., 1987, *Last Intellectuals, American Culture in the Age of Academe*, Basic Books 2000 with new introduction by the Author.
- 柿木伸之, 2014, 『ベンヤミンの言語哲学 翻訳としての言語, 想起からの歴史』平凡社.
- 柄谷行人, 2005, 『近代文学の終わり』インスクリプト.
- 加藤典洋, 2011, 『3.11 死に神に突き飛ばされる』岩波書店.
, 2013, 『二つの講演 戦後思想の射程について』岩波書店.
- Melossi, D. 1990 *The State of Social Control*, Polity. (= 1992, 竹谷俊一訳 『社会的統制の国家』彩流社).
- Menand, L., 2001, *The Metaphysical Club*, Farrar, Straus & Giroux. (= 2011 野口良平・那須耕介・石井素子訳, 『メタフィジカル・クラブ 米国 100 年の精神史』みすず書房).
- Mills, C. W., 1941, *Sociological Account of Pragmatism*, Ph.D. Dissertation, Univ of Wisconsin 1964 Horowitz ed. *Sociology and Pragmatism*, Oxford Univ. Press (= 1969, 本間康平訳, 『社会学とプラグマティズム』紀伊国屋書店).
, 1948, “Sociological Poetry” *Politics* 5 (Spring 1948). Summers ed. 2008.
, 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press (= 1965 鈴木広訳 『社会学的想像力』紀伊国屋書店).
, 2000. *C. Wright Mills: Letters and Autobiographical Writings*, University of California Press.
- Scott J. N., Nelsen, A., 2013, *C. Wright Mills and the Sociological Imagination*, Edward Elgar
- 盛山和夫, 2006, 「理論社会学としての公共社会学にむけて」『社会学評論』57-1。2000 (講談社学術文庫)。

社会イノベーション研究

- 鶴見俊輔, [1950] 1991, 『鶴見俊輔集 1 アメリカ哲学』(筑摩書房).
 , 1992, 『鶴見俊輔集 3 記号論』(筑摩書房).
 , 2007, 『たまたまこの世界に生まれて 半世紀後の『アメリカ哲学』講義』編集
 グループ SURE.
- Summers, J. H., 2006, “Perpetual Revelations: C. Wright Mills and Paul Lazarsfeld” *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 608 Nov..
 , 2007, “James Agee and C. Wright Mills: Sociological Poetry” Lofaro, M. A. ed. *Agee Agonistes: Essays on the Life, Legend, and Works fo James Agee*, University of Tennessee Press.
 , 2008, *Every Fury on Earth*, The Davies Group Publishers. Summers, J. H. ed., 2008, *Politics of Truth: Selected Writings of C. Wright Mills*, Oxford University Press.
- 矢澤修次郎, 1971, 「社会学とプラグマティズム」『思想』559。
 , 1984, 『現代アメリカ社会学史研究』東京大学出版会。
 , 1996, 『アメリカ知識人の思想』東京大学出版会。
 , 2012, 「三人の公共社会学者と公共社会学に関する注釈」『社会学研究』第91号。